



第百十六號 (第十一卷) 昭和五年十二月

過ぎ行く1930年を顧みて

まづ「エロスが来る」といふ聲を擧げて、年頭からゆるゆると此の珍客歡迎の準備をしやうといふ風に段取りを付けて置いた今年であつたに拘らず「それ、ペルテア彗星だ!」、^レ「それ、バイエルだ!!」、^レ「それ、ギルクだ!!!」^レ「それ、シヴスマン・ワクマンだ!!!!」と、矢つぎ早やの彗星訪問を受け、マゴマゴ、マゴマゴやつてゐる——其の眞最中に、こんどは、どうもハヤ「超海王星」といふ^{おほもの}大物が見付かつて來て、吾々をして、益々、手の舞ひ足の踏むところを知らざらしめた。それに、花山ではシンクロノーム標準時計が到着する。又、46センチ反射鏡の大改造が始まる。三角測量塔が立つ。多くの志願助手が來られる、等々々。そして愈々九月末からは主賓格のエロス星が姿を現はすといふ次第。イヤ、どうも今年ほど忙しい歳を迎えたことは今までにない。

中にも、シヴスマン彗星は、先年の^{めいぶつほし}名物星キンネケを其のまゝ思ひ起させるやうな姿と軌道で、五六月頃には負けず劣らずの勢で我が地球に接近し、一時は月と速度を競つた。と同時に、此の星は圖らずも新流星を伴つたので、内外のファンの眼を^{みは}眩らせた中に、中村氏だけが又々抜け馳けの大功名で夥しい微光流星を發見し、一般大衆の失望を嘲ふ姿にも見えた。ところが、全く此の一事件が機縁となつて、「微光流星」といふ新種の天體が特に學界の注意の焦點となり、更に、思ひがけなくも、喜ばしいことには、鹽見、長谷、其の他一二の諸君によつて此の「微光流星」が系統的に、又、同時的に觀測せられ、こゝに流星天文學あつて以來の一大エポックを

作ることとなつた。

超海王星といへば、此の星だけを以つて1930年の代表者と考へて少しも過言でない大事件ではあるが、此の新遊星は発見の最初から二つの深刻な問題を吾人へ投げかけてゐた。其の一つは光輝の問題であり、他の一つは軌道の問題であつた。軌道は、春の頃、全世界の諸家の計算が少しも一致せず圓形か、橢圓か、拋物線か双曲線かの區別さへハッキリしなかつたため、一時は「^{△△}超海王星」などいふ奇名まで附せられて、ロリエルの名の譽れを上げたり下げたりしたものであつた。ところが、流石にスピード時代の名に背かず、ユクルや、キルソン山あたりの古い寫眞板上に此の星が見つけられた結果、バタバタと問題は片付いで、今や、押しも押されもせぬ遊星「ブルート」の品格が遍ねく承認せられることになつた。

ブルートの光輝が、小さ過ぎるといふ問題は今尚ほ全く不可解の事である。之れが急に解けるとは思はれないが、とにかく、此の難問が正解される時に至つて、始めて故ロリエルの名譽が確立するわけである。

今や全世界は舉げて「エロスの時代」に入つた。此の眇たる星が、これ程の視聽を集める理由は、局外者には殆んど考へられないことであらう。しかし、天文の傳統を知るものに取つては、古くして又新しい太陽視差や月の質量の探求のために、此の星が、過去から未來へかけ、如何なる役割りを演じてゐるかは容易に肯ける。精密理學の尖端に立つ此のエロス觀測の大事業が今や刻々として其のクライマックスに迫りつゝあるを思ひ、一種コスモポリタ的な興奮を吾々は感ぜずには居られない。(Y)

ASTRONOMICAL MAGAZINE 「天文學誌」

こんな名の新しい雑誌が、今、京都天文學會で計畫されてゐる。月刊で、キク版、ポイント字、横組み、毎號約100頁。

目的は (1) 新研究の自由な發表と、
(2) 内外諸家の大小論文や新著の紹介と、
(3) 一般學界の迅速確實な動靜の報導、

であつて、眞摯な研究者には最も要求されてゐるもの、しかも今全く缺けてゐるものである。